

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2317 号

Predicting Bacteremia Based on Nurse-Assessed Food Consumption at the Time of Blood Culture

(血液培養施行時における食事摂取量を用いた菌血症予測に関する検討)

小松 孝行 (こまつ たかゆき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

菌血症は患者予後を左右する重要な疾患であり、確定診断には血液培養検査が用いられる。本邦では看護業務の一環として食事摂取量の測定が標準化されており、本研究では食事摂取量が菌血症予測マーカーになり得るかを検討した。対象は 2005 年 1 月から 2009 年 12 月に順天堂大学医学部附属練馬病院で血液培養検査を施行された患者で、6 歳未満、消化管疾患や悪性腫瘍に対する化学療法によって食事摂取不良であった患者、および禁食中であった患者を除いた 1179 名に対して後方視的に検討した。血液培養施行に先行する最終食事摂取量をもとに患者を摂取不良群 (<50%)、中等量摂取群 (>50%, <80%)、正常摂取群 (>80%) の 3 群に分類した。その結果、1179 名のうち経管栄養や経静脈栄養のみを施行していた患者を除いた 16 歳から 99 歳までの 851 名 (平均±標準偏差: 66.8 歳± 16.6) の患者の中で、摂取不良群は 344 名(40.4%)、中等量摂取群は 152 名(17.9%)、そして正常摂取群は 354 名(41.7%)であった。さらにその中で血液培養陽性であった患者は、各々摂取不良群で 63 名、中等量摂取群で 6 名、そして正常摂取群で 6 名であった。このため、食事摂取良好であることが真の菌血症でないとする感度は 92.0%となり、さらに陰性的中率が 98.3%であることから、食事摂取良好の患者が菌血症である可能性は極めて低いと考えられる。なお食事摂取が良好にもかかわらず菌血症であった 6 名の患者の中で、3 名に関しては感染性心内膜炎、椎体椎間板炎、そして骨髄異形成症候群が背景にあり抗菌薬使用中の患者であった。今回の結果から食事摂取量が菌血症診断における単純かつ有用な予測因子になると考えられる。